

松島静雄著 『友子の社会学的考察』

左合, 藤三郎
元『労務管理年誌』編纂委員

<https://doi.org/10.15017/13688>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 10, pp.200-203, 1979-03-03. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：



〈書評〉 松島静雄著 『友子の社会学的考察』

左 合 藤三郎

友子研究文献の第一に挙げられる松島氏の旧著『労働社会学序説』中の後半論文「鉱山労働者の営む生活共同体としての友子」が再刊された。「友子の社会学的考察」がそれである（御茶の水書房、定価一八〇〇円）。

友子（トモコ）は近世に生成した坑夫仲間を基本とする鉱山の同職社会集団であって、近代における鉱業経営の近代化にともないその機能を逐次縮減変容してゆく余儀なきに至り、昭和初め前後からついに衰退解消の途をたどり、およそ第二次大戦時まで存在した労働者団体である。伝承性が強く、近世の方式・様態を多分に遺して来たから、近代の鉱業社会、労働者団体などのなかでは特異な存在として一部の学究や鉱山地方史家などの興味をひき、友子の概略や資料の紹介、調査報告がなされるが、しかし名実共に「研究」といえるのは極めて少い。戦前の農商務省「友子同盟ニ関スル調査」（大正九年）と戦後早々の松島氏の前掲書（昭和二十六年）とは友子研究文献の双璧であるが、前者は概括報告に止まるのに対し、後者は際立ってすぐれた友子研究書である。

再刊の本書を見て、友子に関心を抱いた早々の頃のことか脳裡を奔り、友子の諸問題を思い、感慨ひとしおである。

旧著において知られていることから本書の内容構成は云わずもがなであろうが、本書が友子研究の高峯として聳え、四半世紀の間未だにこれを超える研究が出ない所以の半面を内容に即していえば、およそ次の諸点に見出すことができる。

第一に、社会学の立場から鉱業における同族团的な親分子分集団としての友子の究明を基本テーマとしているだけに、親分子分関係の実態解明には迫力がある（第五章）。文書資料には余り表われない修業や親分子分関係の実態が具体的に示されている。第二に、友子の全般にわたり、これだけひろく詳細な調査研究は未だに見られない。調査研究といっても一山を対象とするものが多いなかで、東国の六鉱山（但し北陸一を含む）・三炭坑の友子につき実地調査している。友子における共同の範囲により（一）一鉱山を単位とする共同、（二）全国鉱山を範囲とする共同、（三）親分子分集団としての共同の三に区分してそれぞれに一章を充てている。（一）は山中交際に相当し、組織、傷病・死者共済を、（二）は全国交際に相当し、浪人交際（単なる離職友子である平浪人と、廃疾共済の奉願帳持参の帳持浪人と）を、（三）は親分子分関係に相当し、取立、修業、親分子分集団としての特質と拡大を、それぞれ主とし（第三、四、五章）、連合交際所については交際の衰退解消過程などと別章において（第六章麥遷）、友子の記録文書、古老聞書などの資料を駆使して具体的にその実態を論究されている。第三に、友子の発生時期が推論されている。自治共済組織が生成せられるに足る要件は鉱業のマニファクチュア化、近代的性格をもった鉱山労働者の多発生にあるとし、これを近世鉱業史に採り、近世初期から幕末の間、ことに上期後半から中期の間であろうという（第二章発生）。第四に、資料が豊富にちりばめられている。私が三十年代半ばに小坂鉱山を訪れた時には、本書の随所に活用されている酒井文書はすでに散佚していた。しかく本書でしか知ることがで

きなくなつた記録文書や古老聞書は多く、貴重である。友子の記録・文書の基本例は本書のなかには見ることができるのである。なお、再刊に当り附加された補章・鉱山に見られる親分子分集団の特質は第五章の同節を主とした同趣の論文だといつてよい。

私が友子に関心を抱いたのは昭和三十年代初めに労務史料編纂に従事してからだが、友子の全態とその資料とを教えられたのは、ほどなくめぐり会つた「労働社会学序説」であつた。有難い手引書であつた。友子という課題には不可欠の書となつた。一読、そういうものであつたか・と興味を深めた。労務史料編纂過程で再読三読して、淡く、そうだろうかナ？の感じが点々と残つた。その後友子という一課題に断続的にかかづらう間に、この感じは醸されて課題となつた。たとえば次の三点がある。

一は、友子の伝承文書については殆ど検討せられていない。二は、西国友子の調査・資料が欠けている。三は、友子の定義は再考の必要がありはしないか。このうち、一は友子の生成、二は友子の種別、また地域圏における存在様態、三は友子の本質規定に関し、なべて原型と様態の基本にかかわる問題点である。だから、少し摘要を加えよう。

第一点の伝承文書に関しては、尤も、松島氏も「金掘権利由来記」は検討され、その記事要件は史実と異なるから偽書であると論断されている。そして一転して、友子発生「問題解決の鍵を坑夫間に伝わる伝承に求めることは全く意義がなく」と裁断して斥け、自助的共済機関は「近代以前の職人の世界においては全く発生の基盤を欠き、近代的性格を有する賃労働の成立をまっしてはじめて発達するもの」だから（二〇頁）、発生の基盤は鉱山業のマニファクチュア化、「近代的

性格を持った労働者が多量に発生」にあるとして（三七頁）、その時期を近世鉱業史のなかに採られている。たしかに友子伝承文書は従来その真偽を疑われて来た。伝承文書のうち最も信頼性の乏しい「金掘権利由来記」の検討のみを以て、由来記より信頼度が高い「山法二十七条」、これに次ぐ「山例五十三条」、これらの抄集である「定法」（別称「山法書」）を直ちに斥けることは早急の裁断にすぎはしないか。またその真偽如何にかわりなく、友子がその存立と綻の根拠として伝奉して来た伝承文書だから、その成立は友子生成史の一の結節点を表わすと考えられる。その内容の史的検討と文書成立時期の究明は友子史、ことに友子の生成を明らかにする上に不可欠の課題であるはずである。「友子発生の時代を定めることは友子の理解を進める上にきわめて必要」（三八頁）ならば一層然りであろう。松島氏の友子発生時期の推論は前記したが、上下限の近世初期―後期から、近世上―中期後半―中期後半の間にしぼられるのは、「一時期を画して成立したと考えるのは無理で、長い期間にわたつて」「次第に内容的整備の段階を辿ってきたもの」（三七頁）というにあるが、この推論の指標はないわけである。伝承文書の成立時期を検討すれば、いま一段と推論を進め得たであろうと考える。

第二点の西国資料の欠如については、ひろくすぐれた本書だけに遺憾である。そのみでなく、「地域的に友子集団の性質を東北型対西南型の二つのタイプ」区分にもかわる。この区分は東国友子間の通説である「亘利（ワタリ）坑夫が主として関東以北において絶対的優位を占めていたのに対し、自坑夫が主として関西以西において強力であつた」（一三頁）というにあるから、検討を経たものとは受取れない。日立の土井由蔵さんは、友子の綻が最も厳格だったのは畑佐と語られているし、一説には渡坑夫、自坑夫とも越後の金山と銅山から発

生したともあるから、なおさら検討すべきである。また東国友子は団結が強烈で、第二次大戦後も多くの意義を保持しているのに対し、西国友子はそれほど重大な意義を「持つとは思われない」(同)から、西国友子は調査されなかったようである。しかし、東国友子の性格を明確にするにはやはり東・西両國友子の実態・資料を比較検討すべきであろう。さらに、上記の東國友子間の通説に複合している友子の種別(渡坑夫と自坑夫)と、地域圏の様態(東國と西國、なお必要においては中部も)とを区別して、それぞれにつき検討するのが第一段階であり、その結果において両者の複合の是非があり、通説の複合の確否が判るのではなからうか。

第三点の友子の定義、坑夫の自助的共済団体は通説であって、本書に限らない。この定義は、鉱業の近代化にともない著しく変容して来た近代友子には一応適合するにしても、近世友子をも通じた友子の定義としては適切であろうか。というのは、本書に見られる諸資料によって近代友子が各面になお継承し遺守してきた近世的な方式・様態が少からず窺い知られるが、これらから通説とは異った定義をひき出すことができるであろう。たとえば、取立免状Ⅱ坑夫昇進免状、渡坑夫の取立面付の構成である大工面付・掘子面付、親分から子分への贈物、修業年限伝承の二様および三年三月十日の謝恩対象別期間による構成伝承などからだけでも取立の原義や修業年限の原型をうかがい得よう。それは通説の定義とは異なる。近世友子の形相は通説の定義と異ったはずである。いずれにしろ、友子の定義であるからには、友子の成立原型に則るべきであるし、近世・近代を通じて適合する定義でなくてはならない。

右の三点とも、実は本書のみの問題ではない。友子研究史上曾て正

当に検討されていない課題なのである。伝承文書の研究は、私ごとき無学の手に負えるものではないので、先学識者の御研究をひそかに渴望して二十年、未だにこの全面的検討のあるのを知らない。東國・西國兩國友子の資料をひろく比較検討した例も聞かない。資料を採録している例とても農商務省調査と、三菱鉱業文書「友子団体調査ニ係ル件」のわずかに二件にすぎない。友子の定義についても通説に対して何らかの疑問なり異を挿むものは無かったといつてよいのである。これらのことは私の寡見の故かもしれないと懸念するが。

農商務省調査、友子団体調査ニ係ル件、長棟鉦山史の研究(小葉田淳著、昭和二十八年)などにより資料的に友子の実態が逐次分つてきたが、ことに本番によりそれは格段に明かにせられた。が、上記のような明かにされていない部分、追究せられていない問題が少からずある。右のはかの諸問題の一端を思いつくまま挙げれば、他職業のそれと甚だ異なるトモコ、の称、他職業の親方子方制に比して異なる親分子分の称、傷病共済機能の成立時期、ユヒ(結)などに準ずる不幸手伝、諸機能の変質消滅の契機、従業員団体に包摂せられた友子の位置づけ、等々。このなかには見たところ些細な問題もあるが、前記の三問題点にどこかで関連し、友子の基本にかかわってゆく問題でもある。

要するに、友子の実態は明かになって来たとはいえども、真相はお白夜にあるといつても過言ではないと考えるのである。残された問題は決して少くない。これらを逐次明かにしてゆくことは、友子に関心を抱く者の課題である、責務である。

ひとつの縁起が生じた。有志が集り友子研究会を設ける準備が始つた。そこに本書が刊行された。友子研究の戦後の出発点であり、導きの書である本書の再刊が、沈滞気味の友子研究を再び促進することを

期待し、また近く発足する友子研究会への問題提起をも兼ねて、本書を通じて友子に関する基本的な課題の一斑を記したのである。

松島さんには、酒井文書や奉願添帳などでも御高情にあずかったが、そのの礼としても、またこれらの問題点は私の課題である。その一に無学を敢て取掛って、四苦八苦の態たらくである。だからこそ一層、縁を覚える。本書の再刊がうれしく、且つ自責を痛感するのである。

(昭五三・九・一三左合記)

執筆者紹介（執筆順）

- | | |
|-------|-----------------------|
| 秀村 選三 | 九州大学教授（経済学部） |
| 山下 直登 | 茨城県立農業大学講師 |
| 荻野 喜弘 | 久留米大学専任講師（商学部） |
| 高島 雅明 | 和歌山大学助教授（経済学部） |
| 入江 寿紀 | 西日本鉄道会社総務部勤務 |
| 今津 健治 | 神戸大学教授（教養部） |
| 今野 孝 | 九州大学大学院博士課程前期（経済学研究科） |
| 川内 昇 | 多久市助役 |
| 稲富 清 | 安川電機製作所小倉診療所長 |
| 三宅 義男 | 元三菱鉱業、後、上山田炭礦（株）総務部長 |
| 細川 章 | 多久市立図書館司書 |
| 江藤 彰彦 | 九州大学大学院博士課程（経済学研究科） |
| 宮崎 太郎 | 筑豊炭鉱遺跡研究会会長 |
| 桑原 三郎 | 近畿大学助教授（九州工学部） |
| 左合藤三郎 | 元『労務管理年誌』編集委員 |
| 八田千恵子 | 佐賀新聞社勤務 |
| 町田 保次 | 熊本行政監察局勤務 |
| 安川 巖 | 福岡地方史談話会幹事 |